

『伊勢物語』第百一段解釈試論

菅原秀

1 はじめに

『伊勢物語』第百一段の話はどのように解釈すべきであるか。特に、和歌自体の解釈をめぐっては、古注以来様々な解釈が見られる。

もちろん物語の和歌は本文の中で様々な役割を担いながら存在するものであり、和歌と本文が関連し高め合いながら一つの話として結実する。ただしこの第百一段の和歌の解釈はこの段をどういう話と見るかによって変わり、またこの話自体が和歌の解釈によって変わるといふ、不可分の関係にありながら複雑な事態を引き起こしているようである。和歌もしくは本文のそのどちらかに重きを置いて決めるべきなのか、それともやはり和歌と本文を関連させて考えるべきなのか。本稿では古注以来の通説をひもとき整理しながら、和歌自体はもちろん、物語本文との関わりから和歌をどう解釈すべきであるのかを検討しつつ、この段がどんな話でどう解釈することができるのか、改めて試論を展開してみたい。

2 和歌解釈の歴史と可能性

この第百一段の話を考えるときに、まず大きく立ちはだかるのが、「あるじのはらからなる」男が詠んだ

という和歌である。

歌の解釈について代表的な古注を見ると、

「忠仁公の栄花の、一家一門に、及をよめり。」『伊勢物語惟清抄』

「藤原忠仁公の栄花一門にをよぶをよめり。」『伊勢物語闕疑抄』

「咲花のしたにかくる、」とは忠仁公のかけをたのむ人多き意なり。『有りしにまさる』とは三尺六寸のふじによせて忠仁公の栄花の、先祖にもこえたる心を云えり」『伊勢物語臆断』

「問、抄云、藤家の忠仁公の栄花、一門におよぶをよめりと有。答、しかるべし。」『伊勢物語童子問』

「次の詞を以てみれば、藤原の太政大臣の祖先にこえて栄えたまふも同じ氏族にて、良近朝臣の如きよき人、其下に多ければ、かくは有らんと其日の上客をはじめて其席なる藤原氏の人を藤の

花にそへていへり。」

『伊勢物語古意』

「咲花のしたにかくる、人おほきに、いよいよ藤も栄えて、もとありしにひときはまさりて、陰の高くひろくなれることかといへる也。しかいふ心は古意にはれたることく、藤原の太政大臣の先祖にこえて栄え給ふもおなじ氏族にて、良近朝臣の如きよき人、其下に多ければ、かくはあるらんといへるにぞありける。」

『伊勢物語新釈』

などである。「咲く花」は、藤の花で藤原氏を象徴し、「かくるる」は、藤の花の下に隠れる、つまり藤原氏の庇護をこうむる意味としているようである。

藤の花に託して祝意を表すものとしているが、託されているのが「忠仁公良房」であるのか、「藤原氏一門」であるのか、「一門」とはいつでも系統が限定されるだろうが、そのいずれかを託すとしている。さらには、良房が祖先にこえて栄えるのも、同じ氏族に良近の如きよき人々が其下に多いからだともできているものもある。

近代に入り、中には『新釈』をふまえたものであろうが、

「「こんなりつばな男が同じ藤原氏に在るのだから藤原氏が栄えるのも当然だという気持ち、さらに進んでは、良近のような人を低い地位に置いておくのは残念だ」という気持ちが裏にあつての表現だと言えないこともあるまい。」^{注1}

とまで指摘する説もある。

たしかに、第九十八段に太政大臣良房に奉った「わが頼む」の歌や、四十の賀など、いわば藤原氏におもねるかのような、またそう解釈せ

しめるような箇所も確実に存在する。ただ、一方で皮肉や諷刺の歌と解釈し、

「藤原氏の権力に追従し、その威を借りようとするような徒輩が多いから、藤原氏はますます権力を大きくしているのだ。」^{注2}「今日の宴にしても、藤原氏の一員である良近を何も主賓にまねかなくなつてよかつたろうに」^{注2}

「咲花の下にかくる、とは忠仁公の陰をたのむ人おほき也。『有りしにまさる藤の陰』とは三尺六寸の藤なれば大かた見し藤にまさる心也。又忠仁公の栄花の先祖にもこえたる心也。下には風の心も有るべしと也。」

『伊勢物語肖聞抄』(『伊勢物語拾穂抄』も同様)

「藤氏一門のかげにつぎつぎと姿を消し去つてゆく他の弱小氏族の運命をこめているにちがいない。」^{注3}

「藤原氏の庇護を蒙る人が多いから、在原氏をさしおいて、藤原氏の傍流がちやはやされていることよ」というあてつけにも解し得る」^{注4}

とする説もある。特に近代に入ると顕著なのだが、この歌に皮肉や諷刺といった意味合いを考える傾向があるようである。

いずれにせよ、この歌の寓する意味を考えるのが一般的のようである。こうした点は、『伊勢物語全釈』^{注5}や『伊勢物語全評釈』^{注6}に極めて明快な整理が見られるが、それを参考に、さらに傾向別に私なりに改めて整理してみると、

賛美型

藤原氏（良房を筆頭とする）全体を賛美する

藤原氏（良近）を賛美する

藤原氏を賛美、在原氏を自嘲する

諷刺型

藤原氏（良房を筆頭とする）全体を諷刺する

藤原氏傍流を諷刺する

藤原氏に媚びる者を諷刺する

その他

底意が秘められているともみられるが、主客良近をたたえたい見るべき

主客良近への単なる挨拶の歌

となろうか。傾向を大づかみに便宜的に整理しているので、先行する説すべてを網羅できないが、この和歌からは、諷刺や皮肉を受け取る説が台頭してきている。

おそらくこれは、和歌の後に続くその場に居合わせた人々の「など、かくしもよむ」という発言、また、男の「太政大臣の榮花のさかりにみまそかりて、藤原氏のことにも榮ゆるを思ひてよめる」という発言、さらには「みな人、そしらずなりにけり。」とあることとの兼ね合いで、歌自体に否定的な意味合いを見、皮肉や諷刺とする解釈が生み出されるのであろう。後の項目で和歌に後続する本文についても検討してみたい。

3 和歌の前の本文について

歌物語における和歌は、歌のみ独立させて解釈するのではなく、そ

の歌が詠まれるに至る本文、つまりいきさつをふまえるのは当然である。またその歌が詠まれた後の本文内容も歌の解釈に関連させるべきなのは当然ではある。ただし、『伊勢物語』の場合、特にこの第百一段の場合は、関連させるさせないには少々慎重な姿勢が必要なのではないかとも思われる。

では、和歌の前の本文を検討していくことにする。まず特徴的なのは、この段は、「左兵衛の督なりける在原の行平」、「上にありける左中弁藤原の良近」という官職と実名が明確に示されていることである。こうしたことから、「あるじのはらかならる」男が業平であること、そして歌の後の男の発言も含めれば、その中に「太政大臣」が良房であることが明確になっている。

人物が明確に特定できることから、史実の考証を行った見解も見られる。簡略すれば第八十七段の行平とともに「左兵衛の督の行平」であり、第八十七段とこの第百一段は同時期の話と判断できる。ただし、行平が「左兵衛督」がであった期間を特定すると、貞観六年三月八日から同十四年八月二十九日となり、この期間の良房の官職と矛盾する。良房が「左中弁」と呼ばれるのは貞観十六年からである。そこで、物語本文と史実の矛盾を解消しようとするならば、行平の官職「左兵衛督」の時期を優先し、良房の「左中弁」を「右中弁」とするか、または逆に良房の官職の時期を優先し、行平の官職が「左兵衛督」ではなく「左衛門督」とすべきかで、誤写の可能性が取りざたされる。

しかし「みな事をかへたる例のわざなり」（『伊勢物語古意』）などのように、物語ゆえの虚構と見ることもでき、そう考えるべきであろう。こうした点は諸注釈書の挙げるところであり、検証整理が尽くされてもいる^{注7）}。

言えるとすれば、行平と良近の二人の官職実名の明確化によって、「あるじのはらかならる」男が業平であることが、明確になっている

ということであろうか。

さらに史実ということでは、業平と良近がともに次侍従であったこともあり、また渤海国使が鴻臚館にきているのを業平が迎え、良近らが国使に太政官牒を授けることもあったらしく、近しく役目を果たしていたことが推測されており、「同輩意識のようなものを感じていたと見るのは行きすぎではあるまい。」^{注8} として、また、「行平と良近も、官歴や、清和天皇の御子をめぐる縁があったとみられる。」^{注9} として、良近と行平業平との関係は決して悪いものではなく、近しい関係にあったことまでの指摘もある。

この風流人の酒席に集うところを見ても、同輩意識などの親しみとといった感情は推測はできようが、いずれにせよ、史実を探っても、この男が皮肉や風刺を込めた歌を詠むべき要素は特に見い出せない。

4 和歌の解釈をめぐって

この和歌が詠まれた「場」というものを考えてみると、行平が饗応の支度をし、良近を主客に客人を招いている。そこには風流のたしなみのある行平が準備した見事な藤の花が瓶にさしてあり、一座の皆がその花を題にして歌を詠んでいる。こうした場に、「あるじのはらからなる」男がやって来て、無理強いされて歌を詠むのである。こうした状況で、歌に皮肉や風刺を込めるということ自体、かなり不自然なことではないだろうか。少なくとも、直接的に相手にそれが伝わるように意図して歌を詠むとは考えにくい。また、それとなく歌に込めるとしても、なぜそのような皮肉や諷刺を、この場の主客や客人たちに向かって込めねばならないのだろうか。

この場には風流のたしなみのある行平が、瓶にみごとに藤の花をさして飾っており、その花房は三尺六寸ばかりもある。この男が来る前、

一座も皆この花を「題にてよむ」とある。当然この男もそれを歌に詠むのである。歌はもちろん主客または居合わせた人々をたたえるのが礼儀であろう。

この点について、「藤の花を題にして詠んでいる場での歌である。だから、この歌も、少なくとも表面上は藤の花を賛美していると見なければならぬ。」^{注10} との指摘があるが、「表面上」とあるのはともかくとしても、賛美していると見るべきなのはその通りであろう。

男は、行平が準備したこの宴席に準備されているめずらしい見事な藤の花を歌に詠み込み、集まった客人たちをふまえ、場にふさわしい和歌を詠んでいる。場をたたえるとはとりもなおさず主客良近をもたたえることになるのである。

ただし、男がこの歌をもつて、ここで藤原氏を賛美したというよりも、あらかじめ行平がこの宴席の準備の段階で見事な藤の花をしつらえていること自体、主客である藤原良近に対する礼儀気遣いなのであって、男がどうこう考えてひねり出したことではなく、すでに「場」にあることなのである。

主客良近のために行平が準備した藤の花、それが飾られた場に居合わせる客人、何より良近、その「場」を叙景歌とでもいうように詠んだのではないか。藤原氏というよりも、この場では厳密には良近へとということになるが、藤の花を準備して賛美するのは、主客良近への礼儀、心遣いであり、その場を歌にすれば自動的に良近、ひいては藤原氏への賛美になるのは当たり前のことなのである。

したがって、男が詠んだ歌の解釈は次のようになるまいか、

咲いているこの藤の花房はあまりに見事で立派で、今日たくさんお集まりの皆さんのような方が大勢隠れるように花房のもとにいらっしやるので、本来の花房の姿よりも優って見える藤の花房

の影であることです。

しかし、居合わせた人々に「など、かくしもよむ」と問われることになる。どういふことであるのか、以後に検討していくことにする。

5 後続本文「など、かくしもよむ」について

この段の歌に皮肉や諷刺の要素を感じ取る場合、その根拠とされているのは、歌の後の本文であろう。

この歌は、後に続くその場に居合わせた人々の「など、かくしもよむ」といふ発言、また、男の「太政大臣の栄花のさかりにみまそかりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」といふ発言、さらには「みな人、そしらずなりにけり。」とあることとの兼ね合いでも、解釈が左右されるようである。

居合わせた人々の「など、かくしもよむ」といふ発言はいったいどういふ主旨のものであろうか。詰問調と解するのが主流なようであるが、その場合、男が詠んだ歌を藤原氏の庇護にあずかろうとするものが多いという嫌味の歌とでも解釈したことになるのだろうか。

まず、質問するということとは、居合わせた客人たちが歌の真意をつかみ損ねているのである。それがわかりにくいから教えてくれと質問しているということなのか、それともなぜこの場に適さぬ不快な歌を詠むのかと詰問しているということなのかである。

「など、かくしもよむ」といふ言い方は、「など」はどういうわけかどういふつもりでと動機や目的を問うものであり、「しも」によって取り立てて強調する言い方になっているのであるから、「どうして、取り立ててこんなふうな詠むのか」といふ、ただ歌の意味を質問するのではなく、強い調子の詰問であろう。詰問するからには、居合わせた

人々はこの歌にただならぬ要素を感じ取っているのである。また、後に「みな人、そしらずなりにけり。」とあり、「そしらず」なのであるから、やはり強い調子の詰問だったのである。

ただし、このことをもって、和歌の真意が皮肉や諷刺とするにはやや慎重にならざるを得ない。受け手の解釈と詠み手の真意が常に一致することが前提ならばよいのだが、この話においてはそれが保障されるとは言い難い。

それから、和歌の前にある「もとより歌のことは知らざりければ」や「すまひけれど、しひてよませければ」といふ記述があり、男にしてみれば謙遜ともとれるので額面通りには受け取れないのだが、歌をうまく詠めない者が、強いられて急に詠むことになったという前置きが成されている。この点を「卑下・謙退のポーズ」で「独白の筆法」注11とこの物語ならではの特徴と見る向きもある。また、これは皮肉や風刺を込める隠れ蓑と考えられなくもない。それに前置き通りの男が意味の分かりにくい歌を詠み、単に歌意を問われているとも考えられる。

居合わせた客人たちが歌の真意をつかみ損ねていることを、歌の意味が分かりにくいと見ている指摘がある。「あやしき藤」の現場の景を題の通りに詠んだものとして了解できるところだが、「多みありしにまさる」が余分で了解しがたく、一同がそしつたとし、歌のわかりにくい箇所を、「多みありしにまさる」の部分と見て、「一同には何のことか理解できない。」注12とする説である。

しかし、「など、かくしもよむ」のような詰問は、先に検討したように、単に分からないことを問うのと違って、少なからず不快な要素を感じ取っていなければ出ない調子である。したがって、分からないというよりも、不快感を感じ取ったと見るのが自然であろう。箇所を挙げるとすれば「下にかくるる」の表現ということになるだろう。

また、「ありしにまさる藤のかげかも」を「以前にまして藤の花の陰

が広く大きく見える」とし、その原因を「咲く花の下にかくる人多み」として、「一座の客人たちはこの『あやしき』ほどに大きい藤の花の引き立て役だということになる。『客人に対して失礼な』、と主人の行平をはじめ人々が不審に思い詰問するのも当然である。」^{注15}との指摘もあり、「咲く花の下にかくる人おほみ」の箇所を誤解される点を指摘している。

しかし、この段では、和歌の前の本文の検討のところでも触れたように、行平や良近が官職が付けれられ、他の段よりも明確に個人を特定する書き方が成されている。「あるじのはらかなる」男が業平であろうと、より強く意識される。だとすればそれなりの歌詠みであることは居合わせた人々も承知はずという設定になるはずである。読者もこの男が意味不明な歌を詠み、どういう意味かを問われたとは考えにくいのではないだろうか。

和歌を文字通り解釈しても、その場に準備された藤の花房の見事さと主客および客人たちをふまえた、それなりに場に適した歌である。ただし、やはり詠んで即、居合わせて人々を納得させる歌でなかったことは事実であって、受け手の解釈に疑問を残す和歌であったのである。

それならば、質問なり詰問されることはあらかじめ予測してあえて詠んでいるのか、それとも予想外だったのだろうか。

「初めからそのように持つて行って最後にそうか！成程！と一同に感嘆させて、祝儀の意を一段と鮮やかに認識させようという魂胆で詠んだ歌である。」と計画性を指摘し、「しめしめ、といわんばかりにこの歌の絵解きを、厳かな口調でしてみせる。」「まさに男は翁役を演じたのである。」として、「文学としての和歌の面白さ、すばらしさを主題に物語る」^{注14}とする説もあるが、劇的な展開で和歌の意が見事に転じる面白味はあり、「七七・七九・八一・九七・九八段などと同じく」と

共通性も指摘されている。^{注15}男が翁役を演じるという謂わば劇性を前提にした場合ならば計画性も感じられよう。しかし、劇的なおもしろい解釈にはなるが、あくまで劇性の型とでもいべきものが必ず見られるはずという前提が必要なのであって、そのことから計画性を見取するには慎重にならざるを得ない。

和歌は十二分に場に適したものである。しかし、「したにかくる」の詠みように、懐疑の念を抱き、取り立てて反応する客人がいたということで、男にしてみれば予想外だったと解すべきであろう。

「など、かくしもよむ」は、劇のような予定調和に作用する所謂あの手ではなく、単に分らないことを問うのでもなく、やはり懐疑の念による強い調子の詰問と解するべきであろう。

6 後続本文「太政大臣の栄花のさかりに みまそかりて、藤氏のことに栄ゆるを 思ひてよめる」について

本文の「太政大臣の栄花のさかり」「藤氏のことに栄ゆる」は、前述のとおり明らかに良房のことであり、良房が栄花の絶頂にあり、藤原氏が格別に栄えていることを詠んだとして、書かれた如くで意味も疑いようはない。

たしかに、これらのことを「思ひてよめる」とこの男が言ったのであるから、和歌の意味に還元されてしかるべきとも考えられよう。しかし、この発言は和歌の真意について、詠み手の男が自らすすんで述べたのではなく、その場に居合わせた客人たちの問いに応じて答えたものである。つまり、問われなければ答えることなどしないのであって、問われなければこの発言自体存在しないのである。

さらに、先に述べたように、和歌自体は、その場に準備された藤の

花房の見事さと主客および客人たちをふまえて、それなりに場に適している。ただし、詠んで即、居合わせた人々を納得させる歌でなかったことは事実であって、受け手に懐疑の念から取り立てて反応させる和歌であった。

したがって、男の「太政大臣の栄花のさかりにみまそかりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」という発言は、自分が詠んだ主旨とは違った受け取り方をされていることを、質問の強い調子から瞬時に察知した男が、その言わば誤った受け取り方から起きる不快な意味合いをも氷解し、その場にも適した解釈ができるように、改めてあてがった発言である。

さらに、男が歌を詠んだときに込めている意味とさほどずれるものではなく、傾向は同じである。ただし、和歌の詠んだ際の「場」をふまえて賛美していたのは、行平のしつらえの如く、あくまで主客良近であり、ひいては藤原氏という意味合いという程度であろうが、詰問に應じるに至り、良近個人よりも、良房を筆頭とする藤原氏全体を賛美というふうには、祝儀色がより明確にされているのである。つまり、初めから自分が詠んだ意図とそれほどずれるものではないが、詰問に應じるため、より徹底をはかったと見るべきであろう。

7 後続本文「みな人、そしらずなりにけり。」について

居合わせた客人たちは皆、男の詠んだ歌を非難せずじまいになったというのだが、なぜ非難しなくなってしまったのだろうか。

男の発言は、良房が栄花の絶頂にあり、藤原氏が格別に栄えていることを詠んだというものであるが、それに対して、納得して不快さやまたは怒りが消えたのだろうか、それとも不快なままではあるが何も

言えなくなってしまったのだろうか。

前項で述べたように、男が行ったのは藤原氏賛美の立場の表明であり、詰問に應じるに至り、良近個人よりも、良房を筆頭とする藤原氏全体を賛美というふうには、祝儀色をより明確により徹底をはかったということである。それによってそういう歌なのかと客人たちが納得したのである。

男の歌が藤原氏に対する否定的な意味あいを含む和歌でないことはもちろん、客人たちが藤原氏に不快感を持つといったことは、これまでの検討を通じて、ないもののできるので、栄花の絶頂の藤原氏礼賛を持ち出されては黙らざるを得ないというような解釈は成立し得ない。

「など、かくしもよむ」という強い調子の詰問に対しての、「太政大臣の栄花のさかりにみまそかりて、藤氏のことに栄ゆるを思ひてよめる」という答えであるから、強い調子のざわめきを沈めるための、それなりの強さを備えているものと推測できる。詰問に「さかしくと、ただ態度や調子が強いというよりも、一撃でざわめきを沈めるような内容だ」という意味で強いということである。前の項目で述べたように、和歌を詠んだときよりも、詰問に應じるため、祝儀色がより明確に、より徹底がはかられているのである。そう応じられて納得したという券囲気が支配的となり静まったということとなる。

この段の話の流れは、自分が詠んだ主旨とは違った受け取り方をされていることを、質問の強い調子から瞬時に察知した男が、その言わば誤った受け取り方から起きる不快な意味合いをも氷解し、その場にも適した解釈ができるように、当意即妙に改めてあてがった発言の効果を描くのであって、その効果の絶大さが、「みな人、そしらずなりにけり。」によっても表現されているとも言えるのである。

8 おわりに

これまでの検討をまとめれば、和歌は先に解釈を示したとおり、急に無理強いされて詠んだという前置きどおり、誤解を生むような出来ではあったものの、行平がしつらえた見事な藤の花、主客や客人をもふまえた「場」に十分に適した和歌である。主客良近を賛美していることになるのは、行平の藤の花の準備の段階から当たり前のことであり、男はその「場」で歌を詠むのであるから自然な流れで自動的にそうなるのである。また、検討してきたとおり、詠むにあたって男が歌に皮肉や風刺を込めているとは考えられない。

しかし、男の意図とは別に、懐疑の念を抱き、詰問する者も出て、それが歌に不穏な意味合いを感じ取ったためだと察知した男は、即座に当意即妙に懐疑の念をも氷解させ、さらには場をうまく収めるような受け答えをした。

この段は、和歌自体の魅力よりも、男の受け答えの見事さに主眼が置かれていて、その魅力を味わうべき話と言えよう。仮にこの歌を皮肉や諷刺と解釈してしまえば、調子に乗って、歌に皮肉や風刺を込めてみたが、詰問されて、逃げ腰となり、世に媚びる言辞を弄し、居合わせた人々を納得させた話などならざるを得ない。この段はそんな主人公像の見られる話の系列に属する箇所ではない。皮肉や諷刺を歌に込めたものの、見抜かれ詰問されたため、逃げのために機転をきかせて成功したといった巧みさを表しているのでもない。だいたいそれではこの段の男は物語の中であまりに昔男像から逸脱してはいないだろうか。そんな話ではないはずである。

「太政大臣の栄花のさかりにみまそかりて、藤氏のことにも栄わるを思ひてよめる」という、祝儀色を明確にし、より徹底をはかった発言は、周囲の不穏な空気を察知する能力、それを瞬時に収める能力と

いった男の機転のすばらしさを表現するものである。

やはりこの段の話は、歌の詠みぶりの巧みさが主ではなく、自分の歌がどうとらえられたかを即座に察知し、場の雰囲気をとらえ、なおかつその場に居合わせた人たちの懐疑の念をも氷解する当意即妙な受け答えの見事さが際立つものとすべきであろう。その見事さは祝儀色の明確化により徹底をはかるどころ、しかも歌を詠んだ時から主旨はぶれていないところにもある。

ただし、物語ゆえの状況に関わる情報の少なさは、読者に歴史に思いを馳せ、解釈の自由域へ踏み入ることを許してもいる。というのは客人が懐疑の念を抱き「など、かくしもよむ」と詰問したように、読者もそう思うことはできるのであって、いわば読者に歴史に思いを馳せ、歴史的背景から底意を匂わせ、解釈の自由域へ踏み入ることを許している。つまり、和歌に関わるこの段の本文は、あくまで読者の自由域ではあるが、和歌を玉虫色に輝かせる効果を持っている。読者はこの和歌に、玉虫色の輝きを感じる自由、玉虫色に何色の輝きを強く見るかの自由があるとも言え換えられるであろうか。

この段の魅力は、男の機転のすばらしさにあり、その奥で玉虫色の和歌が光っているところにあるのではないだろうか。

注

本文の引用は石田穰三訳注『新版伊勢物語』(平成二年四月二十日十六版発行、角川書店)によった。ただし諸説引用の際に含まれる本文は、諸氏の用いた本文のままにしてあり、本文の表記の統一などは行っていない。

古註釈の引用は、『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢書』の第一巻から第八巻(昭和六十三年から平成二年)刊行「八木書店」、片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』(昭和四十四年刊行・明治書院)、片桐洋一・山本登朗責任編集『伊勢物語古注釈大成』(二〇〇四年)・〇月刊行・笠間書院)の第一巻から第四巻の該当箇所を利用し、説明の都合上翻刻表記を改めた。

- 1 片桐洋一『鑑賞日本古典文学第5巻伊勢物語大和物語』（昭和五十年十一月三十日発行・角川書店）二二四頁。
- 2 上坂信男『伊勢物語詳解』（昭和四三年十二月十日発行・有精堂）二六八頁。
- 3 今井源衛『伊勢物語』『日本文学講座』第四卷（昭和二十九年十二月発行・東京大学出版会）、後に『今井源衛著作集7在原業平と伊勢物語』（二〇〇四年六月三十日発行・笠間書院）所収。
- 4 渡辺実『新潮日本古典集成伊勢物語』（昭和五十一年九月十日発行・新潮社）一七八頁頭注。
- 5 森本茂『伊勢物語全釈』（昭和四十八年・大学堂書店）四一四から四一六頁。
- 6 竹岡正夫『伊勢物語全評釈古註釈十一首集成』（昭和六十二年四月二十日発行・右文書院）。
- 7 松田喜好『Ⅱ伊勢物語実名登場章段試論4「藤原良近」の登場背景』『伊勢物語致』（平成元年九月二十日発行・笠間書院）。
- 8 1に同じ。二二四頁。
- 9 5に同じ。四一四頁。
- 10 1に同じ。二二二から二二三頁。
- 11 1に同じ。二二二から二二三頁。
- 12 6に同じ。一四〇四頁。
- 13 1に同じ。二二二から二二三頁。
- 14 6に同じ。一四〇六頁。
- 15 6に同じ。一四〇三頁。